

氏名	おおぬま まさひろ 大沼 正寛		
授与学位	博士（工学）		
学位取得年月日	平成16年3月25日		
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項		
研究科，専攻の名称	東北大学大学院工学研究科（博士課程）都市・建築学専攻		
学位論文題目	地域住環境の経年評価と継続活用手法に関する研究		
指導教官	東北大学教授 伊藤邦明		
論文審査委員	主査 東北大学教授 伊藤邦明	東北大学教授 山田大彦	
	教授 藤本信義 (宇都宮大学)	助教授 平山育男 (長岡造形大学)	
	東北大学助教授 野村希晶		

論文内容要旨

現代的命題である「持続可能な循環型社会の構築」において、「地域の住まいの再評価・継続活用」は中核に位置づけられるべき重要事項である。長寿命建築の新規建設もちろん大事であるが、それ以前に既存の住環境を肯定的に受け入れ、少しでも長く使い続けるための新たな価値観、評価理論そして実践手法が求められている。一方、全国60箇所を超える伝統的建造物群保存地区（以下「伝建地区」）は本命題の好例で、既存の制約のなかで、文化財から一般住宅といった新旧多様な構成要素（環境資産）の評価・活用を一つの持続的な地域づくりに統合しなければならないという難題を抱えている。

本研究はこのような背景を踏まえ、既存の地域住環境について「愛着」や「風合い」を深めながら、これを活かし続けていくために必要な評価理論および具体的手法を明らかにすることを目的とし、岩手県金ケ崎町城内諏訪小路伝建地区（以下「対象地区」）の様々な環境資産を対象として、(1) 地域住環境の基本的構成の解明と資産リストの抽出、(2) 経年による「風合い」「愛着」の形成過程の考察と経年評価基礎論の構築、(3) 地域住環境を継続活用するための建築的／非建築的手法の体系的整理、の3点に総合的・実践的に取り組んだものであり、全7章からなる。

第1章は「はじめに」で、背景・目的・研究対象等について述べている。

第2章は「研究の位置づけと方向」で、本論が依拠した「再生建築・住環境持続論」「文化財保存修復学」「農村・地域計画学」「経年劣化と評価・修繕論」「木造住宅／屋外空間論」「風土・時空間論」「地域環境情報」の7分野およびその動向を挙げて本研究の位置づけをみすえ、研究の根本思想の確立、語意定義、および理論試案を行い、研究の方向を明らかにしている。

第3章は「地域住環境の実態」で、環境資産を住居建築、屋外空間、ひとに大別して実態調査を行い、対象地区の特性ならびに住環境の構成に関する一般的知見を明らかにして以降の基礎データを作成している。

まず、筆者がこれまで参画してきた伝建地区保存対策調査、建築遺構の実測調査その他各種調査から、地区の歴史的・地域社会的概要、在郷的な武士住宅の系譜にある住まいの特性、ならびに住環境としての一般性を概説した。続いて地域住環境の構成解明方法として環境資産の分類法および住居構成モデルを提示し、はじめに「住居建築」について、付属屋・公共的な建物を加えた計421棟の外観意匠を全数調査し、伝統／在来による木構法の異質性を踏まえながら、その用途分類、創建年代、特徴を明らかにした(図1)。

つぎに「屋外空間」について、実測・聞き取り・航空写真・図版などにより、水系関連工作物の分布、高木の分布、畑地・草地の分布、地割の概況、さらに一部の街区については詳細な地面表層素材とその面積比ならびに空間利用状況を明らかにした。

そして「ひと」については、地区の世帯数、住民の年齢・転入の別などから「地元人度」なる指標を設定し、その構成および住まい方などに基づいて、人々の営みが地区の風情を支えている事実を指摘した。

以上から対象地区は、資産の物的な古さによる歴史的側面だけでなく、資産の構成(空間形態)と営み(環境維持)による総合的な風土性を評価すべき地域住環境である、との帰結を得た。なかでも莫大な緑の存在感は、建物の近代化による景観上の不調和を補うと同時に、日常不断の手入れが結果的に家ごとの微妙な個性を生んでおり、一般の地域住環境に通じる面が少なくないことが分かった。また住環境の構成原理を明らかにする上で、環境資産の質的／量的分布を積算的に把握する上記調査法の有用性も確認できた。

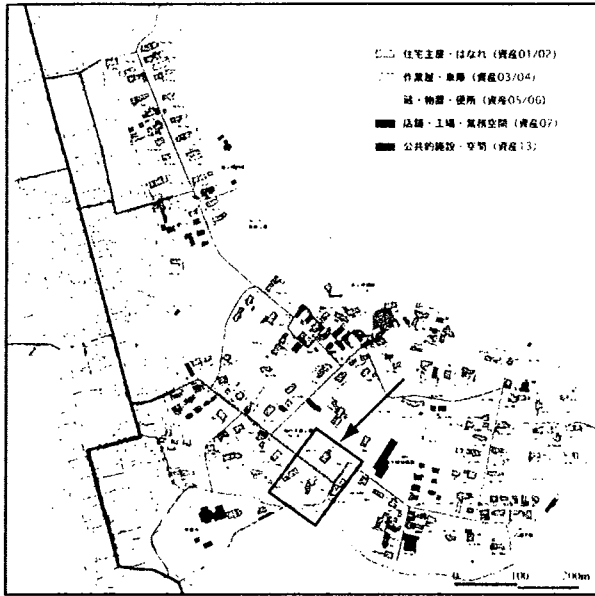
第4章は「経年評価試論」で、「経年価値」に関する概念構築と一般性の検討、環境資産の「経年評価」の方法検討と試行、また「愛着」に関する検討を行っている。

まず、「経年価値」を「ある事象が存在時間の量に従って深めた風合いや愛着を総称した価値」と定義し、環境資産群の経年プロセスを可視的なツールに表して分析・評価することを「経年評価」と定め、概念上の一般性をアンケートにより確認した。次に、その分析内容をもとに「経年価値の変化概形」について検討し、資産の構成材料や特徴に応じた多様な変化概形を想定して、視覚的な「経年評価チャート」上に表した(図2)。なお「耐用年数」の仮定にあたっては、木造住宅に関わる専門家への聞き取りをもとに値を概定した。

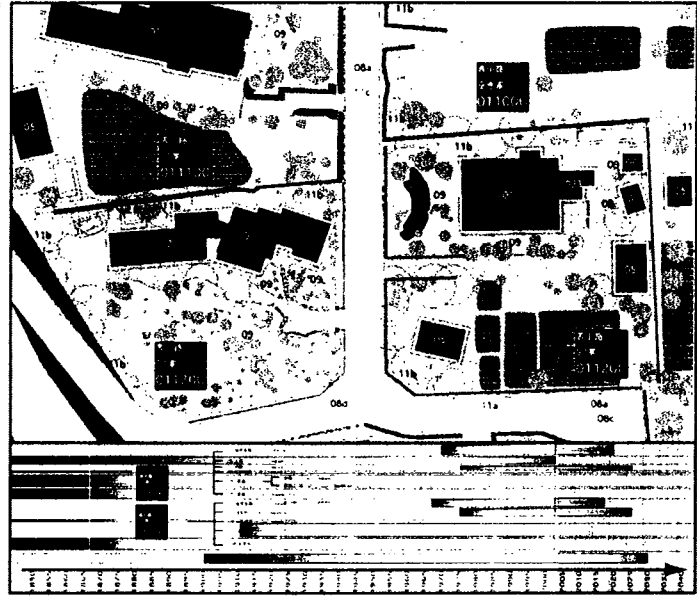
以上をもとに、環境資産としての住宅建築および町並の事例を採り上げ、チャートの試作と分析・評価を行い、本評価法が多様な環境資産の経年価値の部分／全体像を把握する上で有用であることを確認した。

一方、経年によって高まるものとして「住み手の愛着」にも着目した。風土論によれば、住み手は生活経験→愛着→調和 という過程をもって住まいに馴染むと考えられるが、地区内外の聞き取り調査を行うなかで、1)生活経験の共同性は類似の原風景を生み出し、これが好き嫌いや意識・無意識を超えた「親しみとしての愛着」に反映されること、2)環境維持行為が愛着を生み、愛着があるから維持をするという循環性が存在すること、3)せいかつのれきしによる愛着は無意識的であるが、転入者による風合いの評価は意識的・客観的であること、4)対象地区では環境維持活動が「草取り」に代表され、同時に愛着を育んでいる可能性があること、などの知見を抽出した。以上から本来的な「地域住環境の経年評価」とは、客観的な経年評価と主観的な愛着の実態把握の両面的な分析を総称するものである、という帰結を得た。

第5章は「環境資産の継続活用手法に関する実践的検討」で、環境資産の継続活用のあり方を「持続的居



【図1】対象地区の建物分布



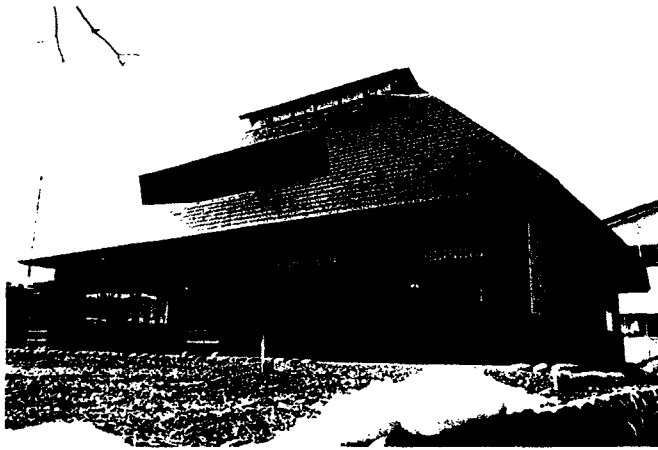
【図2】ある街区の住環境構成実態と経年評価チャートの例

住」「地域型利活用」に大別し、そのための建築的／非建築的手法を「維持管理」「修復」「改修」の3段階に区分して、実践をもとに知見を整理している。

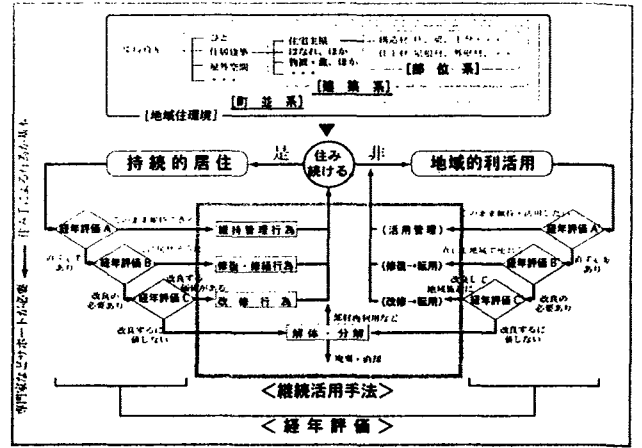
まず、『『持続的居住』のための維持』については、その作業行為や頻度を再分類し、その作業実態や一般的知見を聞き取り調査によって明らかにした。また同じく「修復」「改修」については、伝建地区の場合「現状変更行為」にあたり、これを「伝建地区保存計画」が統御することになるが、筆者が対象地区保存計画の策定に参与した経緯から、3章の内容を踏まえ「空間形態」の存続をめざした計画内容の特徴を解説し、あわせて計画の運用実例、修景指導の内容、筆者による設計実践例などを報じた。

一方『『地域的利活用』のための維持』については、はじめに筆者らが継続してきた生垣剪定イベントの内容を紹介し、参加者が奉仕ではなく学習・余暇のために結集するという、活用に極めて近い維持管理（筆者は「活用管理」と呼ぶ）のあり方に帰着した経緯と成果・意義について述べた。また同じく「修復」「改修」については、対象地区における民家を再利用した保存管理事務所「白糸まちなみ交流館」の建設があり、この設計・建設プロセスを筆者が総括した経過を解説した（図3）。ここでは「歴史文化」「地域社会」「設計技術」の3見地からあらゆる検討を重ね、空間形態の踏襲や部材再利用の徹底、地域特性の表現などを心がけた独特の再生民家を創建し、年に5000人以上の人が訪れる中核施設として機能するという成果を得ている。

以上から、環境資産の継続活用を俯瞰すると、「環境資産は、持続的居住／維持管理行為という循環のなかで愛着や風合いを醸成し、適切な『経年評価』によってより大規模な『修復』『改修』といった処方に至ると同時に、居住が不可能な場合は『地域的利活用』において同様なサイクルが行われる」という図式が描ける（図4）。「資産の有効活用」とはこの活用プロセスを可能な限り長く歩ませることを意味するが、上述の再生民家の場合、過去に居住用として2回、公共用に1回の活用がなされていることから、継続活用の模範例としても参照すべき事例になったといえる。



【図3】 地域的利活用の実践例（白糸まちなみ交流館）



【図4】 環境資産の経年評価・継続活用サイクル図

第6章は「経年評価と活用指針の統合例」で、第4章および第5章の知見をもとに、より具体的な家屋、屋敷を挙げ、評価および活用のあり方を双方向的に検討している。ここでは資産同士の経年の関係、および経年評価と継続活用との関係、住み手と住まいの加齢・経年の関係などを具体的に分析することによって、経年評価における要点や維持・修復による長寿命化の問題などについて考察を深め、経年評価理論における基礎的かつ重要な知見を得た。

第7章は「結言」であり、既存の地域住環境について「愛着」や「風合い」を深めながら活かし続けていくための評価理論および具体的手法について述べた、以上の内容を総括したものである。

要するに本研究は、従来の建築学諸分野との関連をもちながらも、「金ヶ崎町城内諏訪小路伝建地区」という具体的な題材に基づいて、「経年評価」という新規的概念および「資産の継続活用」という地域計画／設計技術に関わる知見導出に取組んだ総合的な内容となっており、これまで問題が複雑化・散逸化し再統合の方途が見出せずいた「既存の地域住環境の再評価・継続活用」を図ろうとする「住環境再生デザイン論」の基礎論と位置づけられる。

論文審査結果の要旨

現代的命題である「持続可能な循環型社会の構築」において、「地域の住まいの再評価・継続活用」は重要であり、既存の住環境を肯定的に受け入れ、少しでも長く使い続けるための新たな価値観、評価理論そして実践手法が求められている。一方、全国 60 箇所を超える伝統的建造物群保存地区は本命題の好例で、文化財から一般住宅といった新旧多様な環境資産の評価・活用を一つの持続的な地域づくりに統合しなければならないという難題を抱えている。本研究は、既存の地域住環境について「愛着」や「風合い」を深めながら、活かし続けていくために必要な評価理論および具体的手法を明らかにすることを目的とし、岩手県金ケ崎町城内諏訪小路伝建地区（以下「対象地区」）の様々な環境資産を対象として、(1) 地域住環境の基本的構成の解明、(2) 経年評価基礎論の構築、(3) 環境資産の継続活用手法の体系的整理、の3点に総合的・実践的に取組んだものであり、全7章からなる。

第1章は「はじめに」で、背景・目的・研究対象等について述べている。

第2章は「研究の位置づけと方向」で、関連分野の動向から本研究の位置づけをみすえ、概念定義や理論の試案を行い、研究の方向性を明確にしている。

第3章は「地域住環境の実態」で、住まいの資産分類法ならびに構成モデルを提示し、住居建築、屋外空間、住民構成に大別して実態調査を行い、対象地区の特性ならびに住環境の構成に関する一般的知見を明らかにしている。

第4章は「経年評価試論」で、「経年価値」の概念構築と一般性の検討、ならびに可視的ツールを用いた「経年評価」の方法を考案している。また、経年のなかで住み手に育まれる「愛着」について、地域における居住者の生活経験に着目し、嗜好性や意識の深層にある愛着と環境維持行為との関わりを指摘している。

第5章は「環境資産の継続活用手法に関する実践的検討」で、継続活用のあり方を「持続的居住」「地域型利活用」に大別し、そのための具体的手法を「維持」「修復」「改修」に分類して、自らの実践内容を交えながら建築的／非建築的手法を体系的に整理している。

第6章と「経年評価と活用指針の統合例」で、第4章および第5章の知見をもとに、より具体的な資産群の評価・活用論を考察している。

第7章は「結言」で、上述内容を簡潔にまとめたものである。

要するに本研究は、これまで問題が複雑化・細分化し再統合の方途が見出せずにいた既存の地域住環境に着目し、その再評価・継続活用を図ろうとする「住環境の再生デザイン」に関する基礎論であり、概念の新規性・独自性や検討内容の具体性・社会性を有しており、建築デザイン学ならびに建築学一般に寄与する所が少なくない。

よって、本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認める。